繪本豐臣勲功記

初編

三

繪本豐臣勲功記初編卷之三

目録

羽柴吉郎若所志寧又母ん

附切採二宸主

織田信長行二異風一紹二献國

附政秀諫死

繪本豊臣勲功記初編卷之三

江戸　櫻澤堂山　編輯

藤吉郎告取志寧父母心　屬切撰民主

海を行ては龍に駕し。山を行ては虎に乘らんと。南園子が妄言とのたまひし。今本ゝが青雲行に。虎に龍虎に駕せぞんべ。三十餘年の戰場を歷て。四海を掌握せらるべけんや。然れ木下藤吉郎高吉。大功紹瑾と顧ざるの語を覺して。主人加兵衛が命とさんも。黄金六両を持齎しつゝ。尾州に還るその本意。快より高吉松下の家を。辭きべに思へども。幸時ありて過せしが。這遣ことゝ幸堯なれ。故郷に還り衣服を袷へ。良主と撰で仕官せんやと。濱名を辭去急ぐに程も。廿五六里二日路にして。尾州の地に來ぬ。直に古郷中邑へ帰るも。おもふ也

ありければ。清洲ありける縁人の。源左衛門が家に到て。せん年の恩を謝し。亦父母の安否とも。問まく思ひて消息けるに。源左衛門宅に在ればと。喃叔父浄土に無事にておはせり。日吉丸ありけるよ。恙もなくて喜悦あり。と俺しき値偶と遁に舒るに。藤吉郎は華て。過越方と語るに。源左衛門も且驚き。且嬉しく。奴くも安ずて在られしものと。急ぎて中村誘行んと。家業の餘事と閑きつ。藤吉郎と伴ひて。竹阿弥が家に投らるゝ。母は素より継父弟阿弥。弥助夫婦もうち歓び。賓客の如く奔走しける。藤吉郎は懐より黄金一両取出し。是と各面に貽つる。然して四五日経ぬる。辰の飯と契まると。其来出て遊歩申過ぬるに家に帰らず。叔のうちは弥助夫婦も。母に面して快く。欵待しかども何日とも。疎く思ひて詞も交さず。有係に母も鞅や

しけん。弟阿弥はうち朝ひ。藤吉郎が累日の狂遊。ように教訓して。と。声曇らせつ嘆くまで。弟阿弥も方僅に堪ずと。日の昏るころ藤吉郎。還るを待て膝近く。咱寄せつ声を潜め。子偶東國に赴き。幾年を経て還来つれども。暴日に流れて在歩き。良主を撰ぶと謂唱春より秋の央に和れども。空徒に日を送るのみ。奉公ずに心も懸ず。然いて家業に怠なれも出さず。徒我隨に徘徊くに。道に背ける不孝なり。親と親とも思はずと。慈愛の怒に母も綽著。子然にて狂遊。齎来りつる黄金も。空しく賜果しつらん。養郎の面目なきものと。剰とりつる言語道断。子が手に数経ぬ。齢も面して忙然と。父母兄弟に何日まで。辛労さもる綽にと。母は泣半に怒り。呵責るに藤吉郎。斯に父母の所教誡。恐惶てありぐて。幷も過し春故郷に

藤吉郎父母の怒を被りて良主と選むの大志を語る

還り。今天まで家の業をも帮助ぜ。乳隨ふ公行せ一緯ハ。是孝行と謁さんとあり。扨又貯齎する銀と。費遣さんとの疑其理ふ應じて听へ。いつで清雲ふ莊まるせで。素ふ財と費ーゆふさん。元来所持の這銀ハ。已来仕へ一松下より。鎧と覓来れとて。黄金六両と與へさん。小子預て松下の家をさんと思へども。身貧して貯ゑー。縦令主君と撰ぶふ。準備あらでハ稱ぶ。奈何いかして調んと。辛酸一ある機會よりも。這遭鎧の價と得ん。這銀とゆて身と繕ろひ。仕宦ゆまべき種とゆー。青志と遂立身して后。誂らくられる新製鎧。其晌こそハ二領三領。百領ふもあれ賠達け。然をれば黄金と奪ひ一名も消。唯主命と遅緩せーのこ。それらの微き過とそ。徒ふ大志と誤つハ。大丈夫の所爲ゆらじと。心と決ー〳〵故郷ふ還りぬ。斯る大事の黄金と。奈何でう徒ふ費ーりまさん。これ責せ這ふ行りと。黄金把ゆて見せければ。父母い敢て本意と紛り。怖く許りふ感佩まる。ゆふも筑阿弥あらば膝行。我と忘れて讃歎ー。吁賢き心ゆる。原よりして尋凡生と。頼てより懐ひーらば。誠言も謂ざりーが。果して大量斯の如ー。子連日ふ出行つるが。良主と討護さりやと。問われて藤吉課ふいまざ仕宦の便宜ふ有れど。大低主君と憑むべき。心方ハと。畠ふ筑阿弥巳しと笑ふ。我試ふ江湖の良將の悉と論ぶべー。まづ京師ゆる將軍家義輝ハ。忍ぶ微弱ふて。武威ふ乏ー〳〵在ーまん。又藝州の元就ハ。威と四海ふ振ふ。他國の者と信ぶ用ひを。今門義元武田信玄偕ふ子が心ふ稱ぶ。然れば。撰で主とまべきん。當國清洲ふ在城ーまを。織田殿ゆらでらある

べくもぞ。上總介信長公は、智勇兼備ふ在さるゝ。人の賢愚を取捨して。手足の如く労使ふ。我愚昧なる見なり。剛才戦國を鎮む器のまゝまもん此君なり。子今より功を立。英名を天下ふ騰んとなら。必介殿ふ仕へて。勧めふ高吉頻首ふ。吁父君の課せ詞。我存念と些も違さんば。快這君ふ仕へんと。心を傾けんへども。その動静の実否を知らで。奉公せんも軽卒なりと。月次日次介殿の。出門の駒ハ躯従ふ。その挙止を沈視ふ。最頼むべき大度の君なり。父の課ふも符合しなれば。ふと決して介殿ふ。仕官なんと詰所せ。毎日〳〵清洲ふ到り。上總介の出遊せる。駒やふあるを待けるふ。其年の九月朔日。介殿鷹の道逢こそ。ふ牧山ふ出られしと。駒こそ来れと藤吉郎。崔躍ふして走けり。其一箇談ハ閣き。後ふ尾州清洲城主織田上總介信長公とのゝせ。ふ桓武天皇十二代の後胤。平相國清盛の嫡孫三位中將資盛より。二十代と謂へり。と歴〳〵末孫なり。新家譜織田の巻ふ云三位中將資盛卿の子權大夫平親實とのふ人江州津田の郷ふ住せその子孫越前の国ふ到り織田の社の神主となる後ふ越前家の守護武衡の家老なり其末織田大和守敏定尾張ふ移り清洲の城ふ主となり後守信秀ハ敏定の孫なり信秀ハ男女子三十三人ありて信長ハ三男なり因て三郎と号せらる信長の父と備後守信秀とのふ。武勇ふ長。智謀ふ富さる良將なれば。ふ〳〵勢盛んなりて。尾張八郡大半ハ砍従て領し。原来尾州ハ斯波家の領せし國なりて。織田氏ハ某ガ臣家なり。原應仁ふ乱てより。斯波の一家二流ふ別る。義廉ハ尾張ふ清洲ふ住し義敏ハ越前ふて大野ふ住せ義達義統義銀侍。清洲ふ在城をとりて。唯名のみて心ふ任せず。織田の一族これと守護して。國政と執行ふ。動ハ他國より掠んとする煒晏なり。さんちひふ織田信秀。智勇飽まで勝をとれば。今門。武田。齋藤。

佐々木。朝倉。北畠。浅井。上杉。毛利。の門こ。八方より犯もとめ。合戦毎度斬贏て。威と隣國ゑ震ひしぶ。今ハ尾州ゑ馬と投。犯さんとの者更ゑ。然るゑ天文三年甲午の歳。信秀の室家一男子と娩ゑハ。幼號と吉法師丸と稱へ。其機大量ゑして小事ゑ拘らず。大膽不敵なること。千軍万馬の中とも。屑とも。恐ぶ。幼稚ゑ。おいし。さまとのこと。夜と。日と。武藝と嗜こ。弓ハ市川大助。鉄砲ハ平田三位房と師こそ。又古渡の門ゑ。毎年春の末風時より。九月ゑ至る央まで。水遊と稱觸し。實ハ水練と試んとこそ。水上ゑ躍り水底ゑ潜り。河沼水象も驚くこそ。或ハ熟田の海上ゑ。船遊して船軍の操練ゑ。逐龍攻撃ひとりとして。自得せもと。いとこそ。これ父信秀。歎べるとかぎりなく。三棘六異の珍寶

黒子曰和氏之璧夜光之珠二棘六異此諸侯之珍寶者也より稽愛ぶて慈しこと年ゑ速くも過来つ。明ぶ天文十五年丙午の歳ゑ。吉法師九十三歳ゑ元服加冠の儀式ゑ。織田三郎信長とゑ。歳新ゑして天文十六年の春ゑ。信長所歳十四歳武者初とて三河國ハ出馬ゑる。三郎傳の居下僕ハ儲公初陣の功名ゑ。俺們ゑ功ゑもるらんと故意大公の出馬と止め。信長と大將とらしめ二千餘騎ゑして大濱ゑる吉良の邊く打発こ。大濱ハ智多郡ゑ郡ゑ鄰る又西尾辺を吉良庄とゑ名古屋ゑ六七里ゑ。然ども敵もる兵も見えるべ這四面と放火こ。悠然らして野陣と構ハ待ども敵軍出會ざるゑ。引退んとせこと信長諸老臣と停られ。今宵ハ這ゑ滞留せこと四まと軍師平ゑ政秀信長の詞と訪り。這ハ敵地の不知案内間夜の野陣ハ殆危し。快所歸陣こそ。ゑうべけれと

言ふ三郎頭面うち掉吾その諫是ふあらむ。徒火と放つのみ
ゐて功をも建む退くハ ゐど英雄の所志ならんや。臨機應変の
進退あり今退らば却て危し。用心嚴まゐ此處ふ待ゐば不時
の功あらんと所て政秀いろ〳〵訓り。退きゐふ危しとふ所存いと
と訓ると信長莞示とうち笑ひ。予頼てより其方ゞ教指の道を
守るゞ故ふ斯の如く滞陣せり。今日敵地ふ襲投放火とゐて
威を顕せど敵兵一騎も発ざるハ自軍の退陣まぐき路く伏兵
ゐて歐破らんと謀〳〵緯必然うり予強ふ滞ると詮とまる共
あらざれども彼伏兵を打散て道の開くと待のとり自軍這
と退るも滞陣ゐて居る輪ハ敵の謀計齟齬て伏兵漸く
怠屈せば退くあれば進むもあるべし。怪る所と自軍ふも隊伍を

固めて歐発ゐば。敵と敗らん緯易うるべしと。日まゐ詞ふ承ゐ〳〵ぐる。
諸勇士ゐ〳〵感伏し。吁思慮莫大ある大將ゐる。數度戰場
ふ臨ゐ者もら。斯ふ心属ざるふ。四海ふ類もゐき君ぞや凡人
ゐらじと稱讃せり。本ゐハ猶更喜起。然ば儲公の神慮ふ從ひ。
隊伍を立んと諸士ふ指揮ゐ。二千の兵と五伍ふ賦ち。八百餘騎
ふ本陣を守らせ。三百餘騎の精兵と。四五丁隔て堆伏させ。敵兵
今ふも推来らば。披罩を歐んぎと。計設て窺待。輪ふ信長自ら
工夫し。雑兵輩ふ口屬つ。蒼竹數百砍取らせ。その丈一丈餘ふ
ゐて先を鋭く尖らせろ。是と竹槍と名と呼せて。歩兵ふ食持
せろ。然して時稍子ふ入ころ。今門方の軍士們。昼のうちふ出會ぞ。
敵の労れて退く路ふ。伏兵ゐて歐んぎと。待ふ甲斐ゐ〳〵日ハ暮

信長初陣大濱へ
撃出て明察剛膽
今川勢の夜駆を
頗る捉拉ぐ

さりぬるを待ぞも織田勢のもとゝも攝く機色ゑく。陣を堅めて滯留せ〜ゝべ。先夜歐とうけよやと。堆伏の兵一千餘騎。窠耳ふ潜と鳴を出て。尾張武者の肝損させん。ゝれ〜と襲来り。本陣めがけて投らんとも。然るを織田の軍中よハ。相澤と思しき一烽の。半空ふ鳴くや否や。織田ゞ隊水八百餘人。鑓鉞そろ〜〜搠発し。五伍の隊列ともとも案さゞ。賸先隊の歩兵们。竹槍の鉞きと。無右無左ふ鏑起〜。歩地〜と進むゆぞ。今川勢ハ窠ふ相違し。偖ハ敵ふも小心あつ〜。夜歐と待しと思ゝ〜り。快退揚と声〜ふ。ふ紹して退んとゑ〜れども。織田家の勇士勢猛く。搠起〜〜探ゞり〜べ。今川勢ハ途と失ひ。先と爭ひ路と求め。逃るゑゝるも名と惜を。恥と思ふ輩ハ。踏止つ〜血戰ゑ。斬殺る者を〜ゑゝらむ。斯てハ織田の軍兵も。若干討死ぬべく見えし。四方ふ伏る五伍の精兵。一時ふ起て今川勢と。中ふ歩〜と推擒こゆ。敵ふしてゝれんもと責著られて前後も辨ぜず。逃るふ紛れて同士討もるゝり。名もなき駄卒ふ撃るゝありて。遁る者ハ最稀ゑり。這駒信長諸士ふ指揮ゑ。先這隙ふ退くべきぞ。劇て一個も後ゝゑと。自軍と纏めて静〜と。野陣と拂てひき退き。尾州の地ふ至り〜頃。夜ハ呆〜と曉さりけを。今川方ハ夜軍と傷損ゞ。最口惜く思ひつ。夜曉るやいなや。新勢とゑ〜。昨夜の恥と雪んと。問と咎りて推進せ見れば。織田勢已ふ隊伍と拂ひ。去も叮嚀ふ掃除し。何處ゞ陣の痕るやと。男ハたゝりふあり〜べ。今川方の勇士傾。悄ふ感ゞて退きける。恁て三郎信長ハ十四歳の

初陣ふ。那許の奇計と做しる絆。父信秀ふもきこしめし。歓悦斜ならずして。信長こそ真ゆて織田の家督ゆれと。思慮と決せられける所謂へ。備後守ゲ妾腹ふ。長男あり。三郎五郎信廣と稱し。信長とゆて嫡子とも。然るふ這節美濃國稲葉山の城主。齋藤山城守利政入道道三といふ者あり。猛威と鄰國ふ振しゆ故ふ。織田信秀とも戮遭う。挑闘ふ絆ありう。近来齋藤道三ハ。美濃一國と領しられば。軍兵もまこと多ありける由へ。織田の兵士とらふる時ハ。三ゲ一も敵といへども。織田勢殊ふ強きとゆて。齋藤これふ碎易ず。然るふ織田の軍長師。平ゆ中務丞政秀ゲ調畧とゆて。道三ゲ娘乙姫道三ゲ第四女と要て。

室家ふせんとも。道三も又預てより。織田の強氣と頼りく思ふ。ゆゆくふ自方ふ成さんゆと。速ふこれと諾受ゆ。頃ハ天文十八年正月下瀚良辰と撰ばれ。道三入道息女と送りて那古野の城へ入輿ゆさ。

或ハ天文十七年の冬とゆり。私ふ按ずるふ年ゆ中務ゲ堀田道空ゆ賀和の書の奥ふ神ひちて結ふ一水の凍ゆ春ゆ久ふの風やそらゆ」ゆ方とゆて推ときハ和睦ハ三春のころ下旬ゆらん歟。婚姻

信長と婚儀と調へ。漆膠の睦と結びゆれば。両家の士庶くらの下民ゆて。齋〻〻万歳と祝〻ける。

織田信長行異風誑敵國屬政秀諫死

現ふ歓樂の窮ゆる時ハ哀情多〻〻。漢武の辞も宜ゆるるる。備後守信秀公。同年二月の上澣より。疾ふ犯され卧ゆ。醫療の術と尽ゆとも。験いなくて三月三日。四十二歳と命期ゆて。修羅王廳ふ座と轉じぬ。法名と桃岩院大翁居士と号ゆ信長織田ふ家督ゆて。清洲名古野

羊と領し。然して一宇と建立し。萬松寺と稱へつ。這ふ葬送の法會と修行せ。此年信長十六歳ふならせ給ふ。意趣や有けん其年より專異風と好まして。其所行も尋常ならぬ。市中ふ往来なす駒へ。馬上なるふ菓實なんど。手の觸まゝ〳〵摘喫ふ。恁る繈ども多入りける故。士家民屋の人〳〵まで。噫痛ましや大將ふは。狂氣〳〵なるとなんと。嘆くもいりふ笑ふもあり。忠臣老士ふ諫言すれども容ひなくば。意の隨ふ挙止ける。這次父が卒去あつて。法度の壇ふ荘厳なんと。愁傷なる氣色も見えず。抹香掬んで位牌ふ抛著。左右も眄ふも退座せり。諸人いこれふ軒駭き。臣家ハ心安らはず。家督の君の斯あつては。國家全き難いと。悲しむ者も多かりしかば。平手政秀見るふ忍びず。頻ふ諫書と奉て。天ふ齊き父君の御別

離と聊愁ひ給ひて萬ふ我意とのみ子なる道ふ背き下万人の歎と起せ御弱年とはいふ。家督の首なれば能御心を謹慎ふ遊ばさんべ當家の安危覚束なく。御所為と愁されて父君の御追善と最叮嚀ふ執行ふ慈るべしと諫けると。信長聞て打黙頭然ば亡父の追福と諸人の心を安らはんと。即時ふ務麻へ命と傳へ國の道端へ関所と居往還の法子と悉く捕来れと嚴ふ徇へつゝ或ハ怪と或ハ驚き僧と捕来りなばいつるも憂目ふ逢せじん為と安き心もなりぎれども命の如く関所を拵へ連日ふ往来の僧と捕ふ。信長これと聞〳〵給れ弘き慮ふ請ふ容護士とつけ〳〵日〳〵三時例の如くふ齋食と賄なひ己三百餘人と集へべ。信長殊ふ悦給れ平日より嚴ふ裝束して多人の僧侶ふ對面

せられ。四月下旬に亡父信秀の四十九陰に中りぬれば。萬松寺の法堂
にて各讀經唱念等。善道增進さらんかと懇勤に伸られる
に。二百餘人の大衆俄に敢て安途の色と顯し。早速万松寺に赴きぬ。
四月廿一日に四十九日の當日なれば。梵唄念佛丹誠ことごとし。法養美
美〻〻事終て。百味に載る齊食と覽施し。分に過ぎる黄金
若干布施して僧に賜へ。禮厚くして皇と賜る是に衆僧は
歡喜の〻信長の器量と感ず各東西に分散しけり。城中是を
見て聞て悅讃るもあるが中に政秀は心痛の〻に觸
て教訓しければ。一時は用ひるに見やれど。猶口と過れば素のまま
これに弦政秀も計飽して在りける。茲に平手が嫡子に五郎左衛
門と云ふ者あり。頗る剣馬に達し。時に能に誇て慢して

他と誹ることも多くして這程駿足と討獲て。大に秘藏の〻けると。
信長風に聞きつめし。別て好める道なるに。彼駿足と呼よせ。近く
侍て見るに。聞に勝る逸物なれば。頻に懇望の〻に。使とて
謂入けるに。五郎左衛門預てより。信長といふ疎を。須臾生ずと
嘲り居ければ。使者に對ひ笑て謂へり。必狂ひき所身做に。此駿
足と求むるとも。何の備に達のあらん。烏騅あれども項羽の〻。赤兎
馬あれども関羽の〻。恁る名馬も騎主に侍る。易き望をとて
。馬に乗る蹴られ嶮岨の〻あらば。所痛きの〻。且這馬に我武
備なれば。呈献ぐと含へるに。使者信長の所に來て。五郎左
衛門の禀せし如く。語ると聞て信長は。素より火急の性質なれば。
衣と裂て憤怒と発し悪き狗卒が雑言に。耶の藝と誇らて。

平手五郎左衛門
馬をもとて
却く
主君
信長を
罵辱を

主と侮ることそ安からね。先や渠が腹切せ。諸人の身懲しめんと。
敦圃く怒りゐつと。近士の輩四傍が把着いろ〳〵と宥め。五郎左
衛門が憎く思まべけれど。父政秀が免ぜられ。只管敬〳〵まれ。
と詞を竭して諫けれど漸く怒と收めゐ。これより五郎左衛門を
憎とゐひ。君臣不快の中となれと。政秀これを傳聞。我子と痛く
叱誡め。這等の緯と知ざる態して。一向主君の行狀と革めんと。諫
むる誠忠。然ども信長馬の事より。不興の体のみ見くさせゐつ。我
ゐぐら心ゐらぜ。智謀が富る政秀も。諫あぐで方僅いなや。諫書
と残〳〵切腹〳〵。誠忠と顯まべ〳〵と。所念と決し。嫡子五郎左衛門
と膝下が招き。汝一匹の馬と惜ま。君の所心と損ふ。汝が勿論
乃父まで憎をゐひく。諫言と粟粒ども用ひゐつ。昔日故殿秀信

の命と奉。大小事がうぐらぐ。教訓もが〳〵奉れべ。君の行跡善も悪
も。貪乃父の教導が憑りと。黄泉が在も亡君の思〳〵めもん。鞏の
心苦〳〵。如何ゐもゐて所心と。革させもらんと寐る間も忘れぜ。諫
言の工夫もるより外他事ゐ〳〵。然るが這程の蹺蹊ゐて。假令富
貴那の辯と振ども。その易更がゐるべ〳〵。是貪汝が無禮が起れり。
此罪と謝〳〵まらんゐ。汝速が切腹せよ。我亦諫めて聞ざれべに死
もの道がよろく自害せん。父子潔く死とゐるべ。亡君よりや俺們
と猶憎〳〵と思まず。我君も亦もと〳〵。革心まゐまも因ども
ゐりんん。徒浮〳〵と日と経るうち。万ず一も當家の来地と。境窺が
敵のゐめが。一里一村奪まゐべ。死〳〵て冥途へ至るとも。故殿へ何と
解語せんや。方僅こそ年ま政秀父子。自殺ゐまぐき時ゐれと。父が

勸めふ五郎左衛門。恐入く平伏し。父の教ふ従ひそ。無禮の解語つゝまつらんと。謂もをらゝを渾肌脱。腹十文字ふ掻斬て。附伏ふ死してけり。義肝ある哉政秀い。我子の自殺と傍ふ見ゐゞら。心静ふ筆執揚。諫書と長くと書終り。扨次男監物秀時と呼出し。軍學の秘書陣法の密意。六韜三畧の奥義まで。残る隈なく傳授ゑ。次ふ諫書と楚とゝて。仔細ふ遺言ゑ畢り。腹掻切て死しける。嗚呼義ある。忠ある。周公の成王ふ於る。管仲の桓公ふ於る。子胥の夫差ふ於る。大次下ありとのゝども。其忠心ふ至てい。政秀もまゝ劣るまじ。開も居らして君と諫めこれと容られざる駒い。或い退き或い遁ま。主と諍ぞる族もあるふ。平ゑ中務亟政秀い。諫言と渴して君居の禮義と乱きを。更ふ我子の無禮と責て。父子一斉ふ切腹せしむ。まゝも死しても其君と。強く諫めて善ふ導くい。無双の忠臣と謂つべし。然そゞふ平ゑ監物い。父兄の血腥と左右ふ見て。目も眩心もうも乱ま。悲歎ふ沈てありけるゞ。時刻移らば士士の。忠義も水の泡沫ゑらんと。泪掻拭禮服しつ。父の遺書と携て。信長の弟ふ祝儀ゑ。父が始末と備ふ伸。遺書と把て擎げられば。信長大ふ驚きゐひ。忙しく封推鑽。開て観覧しつふ。數箇條の諫言ふ誠と顕し。義と渴し且五郎左衛門が無禮とも。序赦あらば厚恩の。是ふ過つる筆あらじと。筆信やうふ記しつゝ。信長ゆまゞ讀も畢らぬ。潸と落涙ゑ。噴政秀ゞ思語ち自刄せり惜ふ入る海ましひうる。今より誰と軍議とゑきんと。要時諫書と顔ふあて。声と放ちて嘆息も。傍ふ見るさく痛ましく。監物も不覺の泪堰敢ま。父兄の

自害詞ゆも。竭きぬ哀を含ぬれども。方僅亦主君と称まれば。誰と斯を惜まるん。然まれば自害も徒ならずと。心雄々しく思るゝ。威儀と整して言状しける。亡父と然まを思えんゆ。せめて諫書の十が一とも。常執用賜らば亡魂も功ぞ悦ん。只管願ひ奉ると言あれば信長公。いつより柔和の氣色まして。我政秀が諫言と須ひざるゆあらざれども。恁る戦國の中なれば。容易ず意を他ゆ譚らも。然ども渠程の政秀なれば。平心底に識つらんと。故意所ざる体ゆ。今天まで我意ゆ過つるが。斯なる緯ゆ曁ぬるん。実ゆ心と知ざりしを。平恁許ゆ異風と好を。傍若無人ゆ挙止こと。只管平と虚耗と見せうけ。敵國の機と奪ん。謀計なりと政秀ゆ。実の頑魯生と。懐ふることを抒憾れ。就中僧と捕へ。法事の布施ゆ若干の黄金と貶一緯。軍用と費を不為ずして。実ゆ笑と哀戚を至情なりと諫つれども。平本意ゆ相違せり。平幼年ゆして慈父ゆ離る。殊ゆ四方ゆ強敵あり。怖るき時節なりと。諸古一襲を思ゆ。平ゆ強敵怖ろしきゆ。父ゆ棄られ一緯との。腸と断思せり。然とそ別り哀戚なび武備ゆ怠る事ゆ出来て。他ゆ甚虚と窺られん。と恐哀と面ゆ顕さも。将又親しき鄰國なりとも。心後して油断ゆならと。謀果せ一粧頑魯。なると衆僧ゆ若干の黄金の観施せ一緯。軍用の費と思ゆざるゆあらざれども。ゆ三百人餘の僧侶俗ゆ雲水散遊の輩なれば。尾州の織田三郎こそ。法會と修して那詐の布施とひきと諸州へ走行。風聴なきび忽ゆ。平名の四方へ聞ひ一雄士大功と立んゆ。先名と諸邦へ鳴せざれば。事と為て容易ず

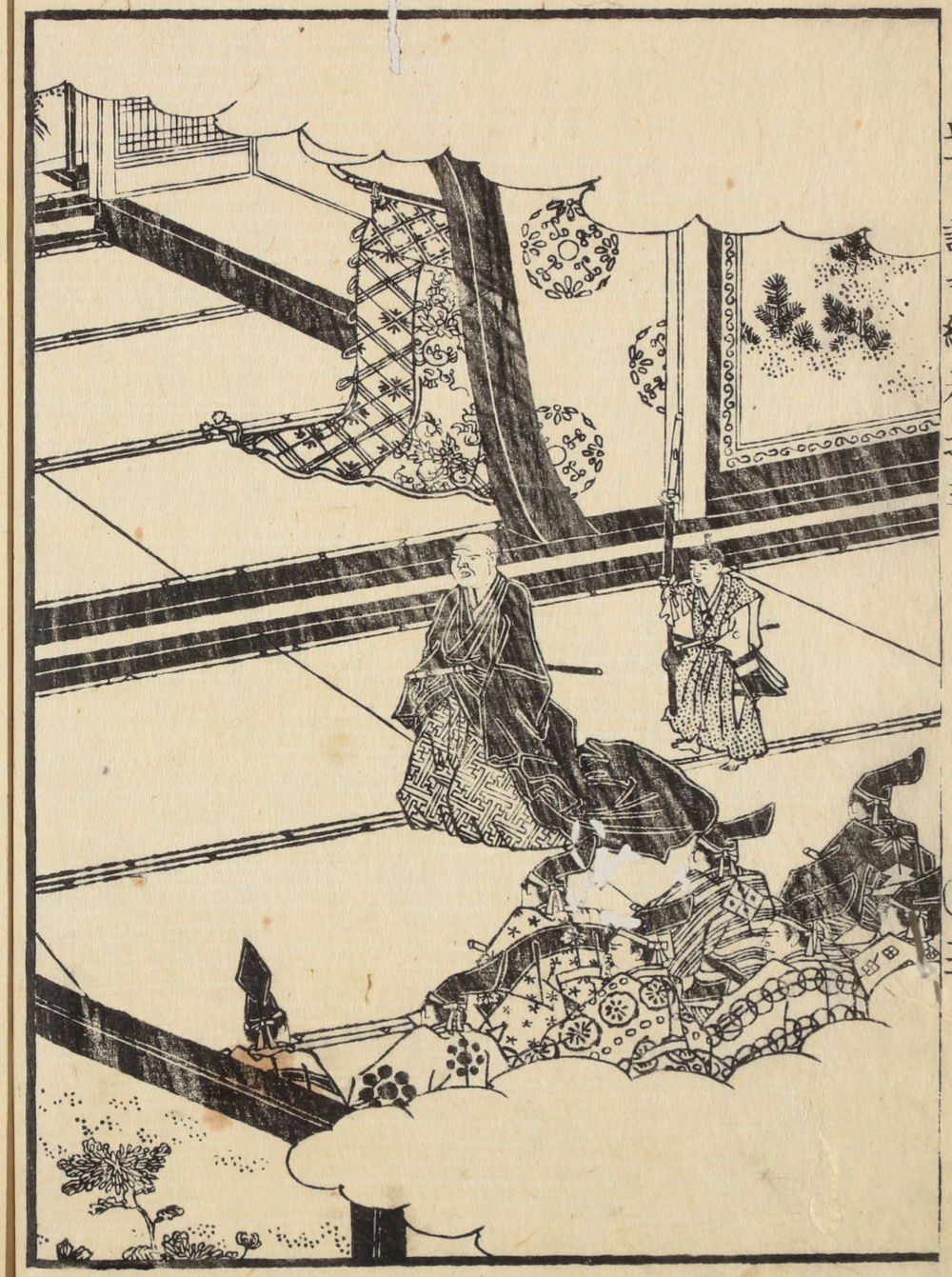
らば。然べとて名と此方より徇て廻る緯も得ざる。這次退善の事こそ竟幸の関て斯い計らひぞ。名と揚兵を強くゐ。國郡を切廣げもせば。亡父の為の退福。これふ恥めよもあらず。政秀此ふ思縁らぬ。智者ふも千慮の一失ゐ。然いひ、予と深く恩ゐく自殺せこそ不便ゐれ。今より行跡と革むこそれば。心易く退蔑せと愁嘆數刻ふ暫ゐへば。監物深く感服し。少年の君ふて。斯まで遠き神慮ある緯。今古無双の名將ゐる然ゐとふ在まそこそも しらば。舌の柔ゐるまふ。嘲謗りまふ。緯。退もぐも恐ろしと。平伏ゐて涙膜。信長涙て曰ふ。汝這詞と世の人ふ必とも余他まぐらば。唯政秀の諫死ふ同。行跡と革めと。披露せば忠臣の所志とも失ゐて都て其名と揚る理ゐと。曰まふ監物

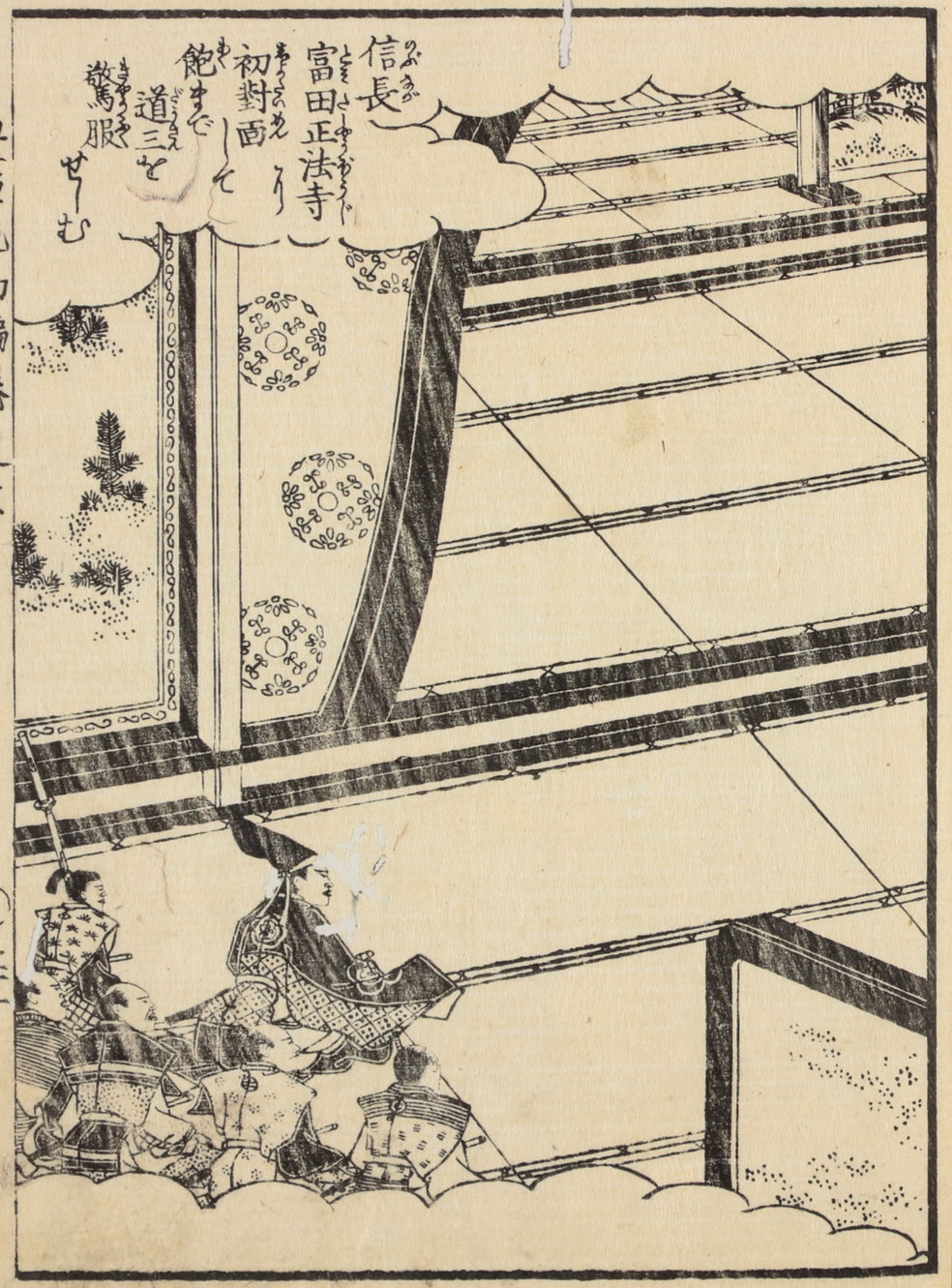
秀時まもく君の慈恵と甘ト獨安途の思ひとゐ。斯て其后信長も希有の挙止休しゐ城中の諸士ハ政秀ゐ諫死とのこ讃嘆せう。信長近来狂氣の模様ハ休めれども異用と好をふ緯ハ更ふこれと止めゐ。然るふ美濃の稲葉山ゐる城主。齋藤入道道三ハ織田ふ縁と結びしうぞも信秀程ゐく病死せしくば。道三悔て臍と噛信秀が早世と歎て知らば縁と結ぶ速ふ尾州と斬取べきものと縁者とゐつる拷憾さく。従前信長の蹴蹼と听ふ虚私生とハふ他ゐ。愈風説ふ遠ぐ一家の縁と新截て速ふ軍馬ハ発し尾州と蕎地ふ乗取べし。先いづれふも信長ふ對面して后計らんと使者と尾州ふ遣して道三のハ状と伸けるゐ近年織田家と縁を結び。乙姫入輿ゐし后ハ尾濃両國一家の如く親こ深くゆふ

いまだ一度も對面せざるゆへ剩り疎くしき故とゆて。明後日道三入道富田正法寺まで出迎へ之ければ亦織田殿ゆも彼寺へ御入あれゝとの約束あり。御許諾あらば道三が悦びこれゆ過ぎと言ゝ容るゆ信長も。快諾して退巻ゆ齋藤の使者を飯ゝけり。是ゆ因て齋藤家ゆ其準備とゆゝけるが。道三諸士ゆ命ずゆ這方ハ最厳ゆ行義と正ゝ古実を守り虚礼生の信長ゆ驚顔させんと下辞と傳へ。既ゆ厥天ゆ齋藤の古老ゝ侍各ゝ袴角袍ゆて折面整ゆ待羅と飾り。正法寺の法堂の椽の左右ゆ列座ゆゝ慇懃ゆて相待ける。且道三ハ東西好ゆも富田の街の端末ゆる商家と借てこれゆ潜を容と替つ近士僅ゆ西三ゝ一連三郎信長方僅や来ると庁津と委て窺ゆう這眴織田三郎信長ハ舅道三の契約ゆ因て。祖ゆ乗ゆ當日ゆ乗りぬれば。富田ゆ赴き對面せんと。準備已ゆ具全時。柴田權六平ゆ益物侍。詞と渇して諫るゆ。原肴藤家ハ敵國ゆて。數年戰ひ挑ゝ〳〵ゝ。此方の威ゆ怖れて。縁者とハ成つるゆ。所心と緩さるべゝゝも。且父君逝去こいひ所若年の所身とゆつゝ。敵國の老将と集會の思召ゝも宜ゝかゝゝ。加之道三ハ偽多き性質ゆれば。心中ゆとゝ量ゝ。這遣ハ所労と謂連て。所断詞ゝゆゆまゝと。言まと信長輙くと笑ひ。道三此國へ来るゆるゝ。國中の虚実と窺ハんゆ。彼國へ招き行こと望まれ。縦令入道害心あるとも。那量の約とゆ做発さん。指さる心労ゆ賢ゆべゝゝも。平彼國ゆ到りゆべ。道三と敵ゝて。齋藤の老ゝ侍ゆ肝と冷させ。暮ひとも平。采國へ向足させ。都て大將ゝるゆい。初度の参會こそ大切ゆれ。

諸士の諫言を破りて
上總介信長
富田正法寺の會に赴く

看よ看よ渠が機を奪ひ伏させんと意中あり。はず三郎と華めんとて。上總介と自稱す。次に行列と調へんと。三間柄の鎗と作らせさう。（是は丈八の矛なり 工夫せしめの故）這遭富田に赴きぬ。その行列の打扮。近代の法則に異なれり。先一番に新鑄の鳥銃五百挺。（印本に三百挺とあり）次に三間朱柄の新調鎗。五百條と連れり。次に郡手の士卒百人。僉赤具衣にて馬柔に列す。次に大將上總介。其日の打扮と詳かいそ。淺緑の絲もて髪と茶筌のさまに卷き。遊形染の帷衣に。厭斗つきの太刀緩刀と。鞭長く藁巻にして這と帶し。苧繩の腕貫を着られう。其外腰に燧袋。古瓢など。種々の器と捆着。虎豹の皮もて四桐と繡せる半袴に。肥て猛き驊馬に跨り。七百餘人を牽俱して。岐阻川を西へ渉り。一歩半足の乱行なり。富田の庄に參向せり。已街に到りぬ。彼所の輩老幼尊卑。除重りつ這と觀て。異心同様に駭き呆る。所も赤好の諸侯なると。私語なるに道三は。彼街末の商家に在て。紙戸の隙より信長と。悄く地に視徹。又なも又なもと言されれば。近士も偕にかくやと。唱と一叫笑ふさう。信長これを聞き着つ。馬を驅て商家と觀覦。噴樞尬児なるいうなれば。紙戸の隙より窺みに禮。弓裝束と看人と思へ。眼茶に觀よと。声高らかに呼ばるまを。道こなれに驚うて。背路と蹶拔。精舍に入て決来よと。待に時際なく上總介。葵に乗て。正法寺に登来り。憩廳に脱鞍せられ。頓に衣裝と更めつ。茶筌髪も折髷に。褐布の禮袍に袴と着し。彼刀と鞘ちに帶。嚴然として出まべ。打て飜りて威儀風束。殊勝又大國の大將とこそ見えさうけれ。




信長
富田正法寺
初對面
飽まで
道三を
驚服せしむ

正法寺對面信長服道三屬一統尾張

鷲鵰雛稚なりといへども。千里を翔る風羽あり。信長すなはち六才。恁る大家の齋藤と省ども執敢で方僅正法寺に參會し。威儀騰くと出させしかバ織田家に随ふ臣家なら。よくこそ恁る準備あれまと。感佩してぞ伺候せり。信長法堂の縁に登りしハ齋藤の臣家。堀田道空。春日丹後守等出迎ひ。慇懃に會釈あれども。信長さこしも顧ず。諸士坐列なる其中を躑躅する色なく穿行客廳の向中の柱に倚。五分も髻ずで座しゐける。道三入道近士をひき倶し。廳上に出けるが。信長輩て觀迎もせず。知らぬ顔して在られしかバ。堀田道空信長に朝ひこれこそ山城入道殿にてわたりと稟すに信長座を整し。又もや舅殿にて在しつるよな然ありけるに

更に存ぜず。鷺に街口の商家にて。紙子羽に某と。窺鏡居なりし癖児によくも似たる顔貌なる。挨札せざりし失禮御免。某こそ信長なれど。行義整しく辞状しければ。道三心に怖恐。最先障紙を僅に開。面を潜めて窺ひし。我と早くも觀認し眼力。方僅生ま恁る辞義せしん。吁恐ろしき少士なると感ずる色の露なると。堀田道空取敢ず。銚子土器持出て。初對面の式おこなふす。道三もこれよ氣を属られて。慇懃に挨札あり。信長もその従士にいたるまで。山海の珍味好みと尽し。最叮嚀に歓待なれば。右臣僧に喜悦と餝當日の末と過る頃。辞宴と傳へて覆盃せられ。道三に別辞を告。信長清洲へ牽返すに。道三入道半途までこれと送りて別れしが。齋藤の諸士傍笑て謂ず。纔遣見ても織田殿ハ。頑魯生なる

ひらへぎやと。所て道三大息吹。然るそゝる吾児輩侮へ。遠うらぬ日ふ頼魯生の門弟ふ馬と繋ぐん。と思くべいこそ抔感や。然べこて泥まる脅カへるーと。泪と流して稍要時。言とも謂てありけるが。再び顔ふ皺と添。實ふ信長が器量雄材。洒家の賢べところふ あゝを。遂もの緯ふ濃州一國聘贈ふきんぎと。顔色もうく語られうり。扨も清洲の人くへ。今日信長の挙止と見もー聞もーけるふ因。已来做う頼魯の行跡。深き所思、恵のありつる緯よ。恁る明君ふうーづべ。四方の敵國強くうも。何恐てうやあらん。と歓合て安途ーけるう。又信長ふも已後へ。全く異行と罷られそ。武備専ふ行ひ。威と隣國ふ震ひける。茲ふ弘治二年の春。齋藤道三の嫡子治部大輔義龍遂意と起くて父と打んと軍と出を。とれううそふ道三へ尾州へ

加勢と乞されける故。信長忽地ふ二千餘騎と援兵ーけるが。這兵美濃へ着ざるうち道三入道。鷺山ふて。戦死の由と聞。織田勢これふかゝ。其侭尾州へ牽退しぬ。斯と聞より信長へ。舅の仇うる義龍と征滅さんと思てども。國中のまゞ穏ならぬ。織田の一門動もわべ。謀殺とふて清洲を計る。これがうあふ他國へ向づき暇ふ。殘念ふうら図う。厥所謂と云ふと尋るふ。信長の舎弟末森の城主。武蔵守信行の傅士ふ。林美作守とらふあり。幷佞邪曲の暴生ふれべ。上總介と歐まうせ。信行と主ふうて。我も栄華を極めんと。国權亡ふらびふ兄うる。林佐渡守と荷擔らひ。信長と歐んと企けるが。天罰遂ふ道きがく。美作守ハ稲生ふ ちひく。信長のうめふ誅せらる。舎弟信行面目ふさふ。剃髪うて勸解ふ

り。初の如く末森の城と号へ居城させ。林佐渡守。柴田權六とも罪と敕して。本領安堵なさしめ給ふ。其世語さく休ざるうちに。同じく庶兄大隅守信廣。野心と起して騒動せ。然ども其事遂ぜずして。降参の義こたれり。同年の冬ふ帰り。信行蒔び謀叛と企つ。原来這武藏守へ。婬酒ふ長じ佞人と愛まるが故ふ。姦曲これふ隨ひて志を無道と働くべ。忽遂ふて野心せり。血脉同胞の舍弟なれども。再この謀叛と詐議と決して使者と遣。末森の城へ謂遣せり。這遣信長危病ふ侵され。命且暮ふ逼りしれば。家督と信行ふ譲るべし。快く出駕しそうと。聞て信行大ふ歓び。性質愚昧の悪しさ。何心なく清洲ふ来ると。池田勝三郎信輝。承りて武藏守と誅しぬ。幼稚の男子あり。これと助て養う。林佐渡守これふ縋ふ七兵衛信澄とす斯のごとく一族同胞の間さへ諍乱あつて。國中霧時も穏まらざる故。濃州発向と延引せ。去るぞ木國と固くせんと。道と正し藝と練り。専民ふ仁と施し大度と行ふ。ことをあれ。尾州七郡ハ平均せり。然るふ年号革て。永禄元年とへる。國中大ふ静謐しければ。信長いくも民の苦疾と労えんと。鷹狩の綽と催して。采地巡見と課命さる。頃い永禄元年九月朔日。上總介信長公ふ牧山ふ將せんと。柴田權六勝家。佐久間右衛門尉信盛と敕して。池田勝三郎信輝坂井右近盛種[後ふ政尚と]ふ其勢一千有餘人。辰の正刻ふ清洲と発し。ふ牧山の將場ふ赴き。銘く修練の技と顕そう。

弓鳥銃竹槍なんど。ふふ専門の兵器を携へ。東西南北ふ馳
徊て。鹿猿鬼狐狸の類も及たざる碧霄ふ。鷹を放ちく鋭
類と擒り。多くの獲物ありけるゞ。暫時休息わるべしとく。禁の
廣野ふ陣と居。信長自ら諸士と労ひ。兵種とつうゝ慰う。
厳い猪おき這ふ木下藤吉郎高吉ハ。春より秋のまゝでも。心を
砕て信長の。動靡進退と試るふ。寛雄ふて大度あり。此君ふ
ぞハ仕ふべき人外ふハあらじと。心と心定ゑ一けるくハ。其便宜と得
んものと。日々清洲と徘徊しけるふ。這遭信長小牧山ふ田猟の
ことありけるゆゑ。宜機會ありと彼所ふ到り。直訪ゑんと伺ひ
けるゞ。方僅休息の間ゑそよけれと進出。信長の所業ふよらんと
もると。雑卒あれて推止め。那如ゑれば憚りなく。大将軍の所業へ

通る。豪去おらんと喚つくると。藤吉郎ハ僅ふ身をさげ。只管願ひ
の條あつく。直ふ大將の所業へ参る。切のく思ふき者ゑらゞ。通ふ
と大音ふ。呼たる声ふ駭卒ども。弱く怒せと竹もて。藤吉郎と左
右より塞止。今日所遊猟の場も憚うゝゞ。案内もたのまゝで押通るハ。
必定ゑ樵夫児ふ想遠ゑる事ゞ。捕捕と呵責せんと。歩めき蒐ると大
將信長。遥ふこれと所覧あり。何事ゑるゞ見て参れと。柴田と唱て
命じゑふ。權六拜膜走来り。駭卒輩ふ所謂と問ハ。藤吉郎ゑ動
作と。ありのまゝく差くより。柴田勝家藤吉郎ふ打向ひ。子ハ何國の
者ゑて如何ゑる願ひあれゞこそ。無体ふ所業へ推参せんとも。駭卒
らハ敵國の間者ゑらゞ刺客ゑらん。信条ふ招道せうと。眼と遂
鈎ゑて責るゑゞ。藤吉郎ハ毫も驚ゑゞ。否ふ所業地ふ。出生

織田信長
小牧山ホ田猟して
君臣不思議の
値偶を
結ぶ

ちくる者なれば。刺客間者の族ふあらむ。大将軍の所業参り。直ふ所願ふ事を條有。所心配しあらば。所披露あらく然るべしと。縛る
るべふ演じれば。柴田權六大ふ怒て。吁麁忽なる言條なる。能く〳〵
も願ありて。直ふ所業ふ参ん。とまるへ。斬ける奴ふ想遠なる。斬て
棄べく思へし。所猟場の妨なれば。命ハ助る疾く去れと。怒猪暴
く詈れと。藤吉郎ハ些も聴せず。足下の課せと有ぐ〳〵。這采
還るべどならば。得く這まで参りへせず。願の條とて別儀ふなるぞ。
仕官の望をあるふより。これまで参向りて。拒て所業ハ伴なれよ。
大将我と所覧あるく。倘使ると課せあらば。其時こそ退去せんふ。
唯大将の所一言と。聞まがくゆりと。听より權六堪へる。おのれ下郎
のふりして。信長公へ直訴せんと。身の量知ぬ不敵生。言ふ謂せぞ

捕搦と。指揮〳〵ふ駅卒们。折重て木下と。高ふ眩ふあぐ
細めて。

藤吉郎参將場直訴信長附智舌解衆

張良より履と把り。韓信拒て袴と賣れど。遂ふ漢と起〳〵る。這ふ
藤吉郎高吉。一連織田の奴とありて。芒履と掴る。或ハ權六が脚と
摩も縛。張良韓信ふ髪鬚る。加之今此ふ縛索の辱とうるる
人ども。龍の泥海ふ蟄るふ異ならぞ。頻ふ所業ふ撃居る。信長
原来大雄ふて。思慮深き大将なれば。木下と近く拖出せて。熟〳〵と
所覧ある。權六傍より声太らせ。汝が願満足して。大将の所業参向
せり。訴稟す縛こらば。速ふ言状せよ。倘すぶども莊らば。即時ふ誅
と加へ〳〵と。発盱と睨べ藤吉郎。あせ笑して唇舐て。今日の所將の

獲物ふい。禽獣多くけるべけれど。聞くと取廣げらるべき。便ふいよも相成まじ。小子不肖の軀なれども。よき獲物の將ぜと。言状せんと存ぜ〜故。這まで推參いたしたり〜と。間者刺客の類とちがきれ。誅せられんと課もることを。怪むまでふ意得ざる〜。斯細と蒙ぶるるに。怖ふ足らぬ小子なり。此上ふも猶疑ひもあん。所心浅く所えん。放つとも殺まとも。唯汝意ふ信〜ふく。放ちもつかるべと得て。却〜これを棄るふ齊しく殺まい名珠と碎くふ全じ。下和が珠も名工あけ侍。瓦礫ふ紛ふ。時至らされば足ど斬る。小子更ふ悔まじ。と。謂ふ權六愈ふ怒ぬ。利口ふ糸と振へども。實〜ふらぬ辞こそあれ。今謂狂る其言下ふ。能獲物と進めんなどふ。卑賤ト郎のふて。國主と恐ぬ不敵の廣言。誑者めとふと打消〜。斯ハけ〜ふらぬ者ふる。

く細の身とふつて。我存亡ハ各〜ふ。心の隨まそあるあと。何ふ有ふ誑るべき。仕官の至ありとふひ〜と。執用ひ無ふ。即獲物と棄るふ有らぬや。一跳の鬼一鞠の鶏とふ。ふ。見ふ屬るあふらば。よも見遁ふ做まじ。況や卑賤ト郎ふ。士一個ふ有ひて。人と禽獣とふ。ふ取ふ捨ん。ト郎卑賤とふ。ふ取ふ捨ん。ト郎卑賤とふ。ふ取ふ捨ん。ト郎卑賤の心と。豈格別の應じて。役ふ連べ〜大將軍の所心と。ト郎卑賤の心と。豈格別のふのあらんや。斯波殿（織田の弾正忠殿）土岐殿（斎藤の主殿）武衛殿（朝倉の主殿）何と一國と治めあるる。人ハ相貌の好醜ふよるべらば。大將軍の所眼かゆて。觀摂ぬ世ふ。眼ハ。瓦礫の中より夜光の玉の。出るふ有き緯あるべ〜。小子ふ〜ら尊大ふ誇るふ。わらも。只君臣時機相應の差別と言演るふ。と詞正〜理と諦〜て。演説〜〜〜〜べ。信長一〜耳聾て

藤吉郎小牧山の
田獵場ゟ
極候て信長ゟ
見参ス

聞しめ。まづ權六が命あつて。木下が縄と解せつり。偖勝家と傍が座せしめ。藤吉郎と近く呼され。汝が國と富しめ。兵を強くしむる術あらば。即時が扶持して得さもべきが。胸中にある籌策ありや。試が譚れよと。命せが高吉三尺ゐど膝をして進む。譬ふも良禽は樹と擇び。名臣は主と擇ぶと。別の望をへひらんも。只ふるが主君と頼まらんと存ぜしやの。斯い推參つるまつりねと。稟まが佐久間右衛門尉。君と擇んで仕えんが。定で君の器量まもまチ。所と知て然まその辞とのつまをあらんが。汝も丈量の藝能ありけらん。有べ試が言まべし。「否能そは一能まと藝ありそは一藝ゐ。只膽の大なること斗の像し。天地の間が孕める物。藝能なきものあらんや。況や人の身と受て。其職が應ぜざるべけんや。然何なる能ある者ありとも。用ゆる君のなきにいたらん

其功德と顯さまも。然へ賢愚は主君の御心が因べくれと。憚る色なく言へ。柴田落び盤問る指する藝能なく。只大言と吐のくみなく。倘召抱へ給ひなば。いかなる役と望ゆやまる。然が家宰壮佞健児まも。僉それ〳〵の忠義あり。貴賤高卑の品へらいれど。忠義は同じ忠義が。忠義が上下の差別はあらじ。小子奉公つるまつるが。何の役と望むべき。君の命せが信まるるありと。詞明白が言へければ。信長いとく未曾有ありと。稱歎あつて望その如く。技持し得させん。吁面猿へ猿が像ぞ。小猿よ〳〵勤よと。戯れるべ衆人も小猿〳〵と称号せり然るが信長が殊の外が悦びるに。今日の將の獲物ぞ。木下が掘小猿ぞれ。得し歸城なさもやと。勢ると收め陣と拂ひ。清洲と當しもそ還られける。清張延玉曰謂木下人是也明史日本傳曰信長偶出獵遇一人即樹下驚起衝突執而結之自言爲平秀吉雄健

蹄捷有口辨信長悅之
令牧馬名曰木下人

繪本豐臣勲功記初編卷之三終